



新しくなった論文誌

ヒューマンインタフェース学会
論文誌編集委員会委員長 小谷 賢太郎

本号（2012年2月号（Vol.14, No.1））を今手元でご覧の皆様はすでにお気づきになっていることだと思いますが、創刊号より続いてきた学会誌との合冊形態で紙媒体として発行されてきたヒューマンインタフェース学会論文誌がついに本号より電子媒体で発行されることになりました。論文誌編集委員会にとってこの論文誌の電子化は学会創立以来の大きな大きな変革です。

この決定に至る1年間に渡り、理事会ではたくさんの議論がありました。関連学会の論文誌電子化の流れ、ヒューマンインタフェース学会財政の健全化、新しい表現形式をもつ論文誌への転換、会員に喜ばれる充実した誌面のための改革、会員の皆様にとって意義のある変化を模索しながら、電子化決定後も論文誌編集委員会では議論を重ねてきました。確かにコスト面の改善が学会の方向性としてあったのは否めませんが、最終的にこの形式での発行を決断したのは、やはり「新しい論文誌」への可能性をこれからのヒューマンインタフェース学会が追及していくことができる点があったからではないかと思います。本号より論文誌は追加料金をいただくことなく自由にカラーでの表現を論文誌上で展開することが可能になりました。もちろん、単に論文誌のカラー化だけではなく、ヒューマンインタフェースの研究者にとって、今後音楽や映像などマルチメディアを含んだコンテンツが論文として論文誌に掲載されていく可能性が確立したことには大きな意義があると思います。論文誌としての学術的側面を維持しながらも、ヒューマンインタフェースに関心のある皆様、特に投稿者の皆様にとっては自由で独創的な情報表現の場の提供を、また、読者の皆様にとってはさらに有意義な魅力ある情報を獲得するメディアとして、論文誌の改革をさらに進めていきたいと考えています。これからはそのような新しい形態での論文がどのように掲載されるべきかをさらに慎重に検討していきたいと考えています。

その他にも論文誌編集委員会ではいくつかの改革を進めてきました。少し紹介しますと、以下のようなものになります。

- 論文査読ガイドラインの改正：査読基準を明確にすることで、これまでよりも査読者の方々にとってわかりやすく、評価しやすいガイドラインにしました。また、ヒューマンインタフェース研究開発のための倫理指針が制定されたことに合わせて、投稿規定として論文の倫理指針準拠を明確にしました。また、不採録になった論文が、その際のコメントをもとに論文を修正し、投稿する再投稿論文の方式を制度化しました。これにより、一度不採録となった場合であっても査読者のコメントを反映させた質の高い論文が採録される可能性が高まりました。
- 査読状況の電子化：学会ウェブサイトにおいて、査読状況の公開を始めました。約2週間に一度更新しておりますので、サイトを確認するだけでおおよその状況が把握できるようになったと思います。
- シンポジウムで発表された論文の論文誌投稿推薦制度：昨年度よりシンポジウムでの研究発表に対して、学会論文誌へ論文投稿を推薦する制度を試行しています。もちろん、投稿するかどうかは著者に任されているわけですが、シンポジウムでの発表内容に対して、ポジティブな評価を得ることができるのは意義のあることだと思います。
- 「実践講座」：会誌へ3号連続で論文の書き方に関する実践講座を連載しました。これから初めて投稿しようという方、自著の採録率を高めたいと思っている方、査読を依頼されたけれど、どんなことに気をつけて読めばよいのか知りたい方に、少しでも情報を提供できたのではないかと思います。

私自身の任期は残すところあと2カ月となりましたが、編集委員会ではもっと投稿した論文が早く掲載され、もっとたくさんの論文が掲載される、そしてさらに魅力のある充実した論文誌にしていきたいと考えています。新しくなった論文誌をご覧いただき、ぜひ皆様からの率直なご意見・ご要望を事務局までお寄せいただきたいと思います。また、今後の特集号のテーマ（「このような特集を組んでほしい」など）についても、皆様のご意見をいただければ幸いです。